



地域小規模施設における自立支援

光輝寮 児童指導員 野口 貴章

1. はじめに

光輝寮は、設立以来「あかるく（仏）、ただしく（法）、なかよく（僧）」を生活指針としてきました。子どもたちが将来、社会生活を営むためには、基本的な生活習慣の上に社会常識を身につけること、そして主体的・自律的・積極的に生活する姿勢を身につけることが必要となってきます。

光輝寮では、本体施設からほど近い豊川市中野川町に一戸建て住宅を借り上げ、2018（平成30）年4月に地域小規模児童養護施設「かがやき」を開設しました。小規模ケア体制の中で家庭的な生活感覚をつかみ、自立につなげることを目的とし、社会的自立を目前に控えた高校生、大学生等が生活しています。

今回、「朋13号」でのご報告の機会をいただきました。十分なことがお知らせできるか、いささか心もとないですが、「かがやき」の4年間の報告させていただきます。

2. 生活支援

（1）生活を組み立てること

「自立」に必要なことは何かを考えた時、自身で生活を組み立て、考え、判断して決めることだと考えました。そのためには考える「時間」と「空間」が必要です。児童個々に個室を用意しましたが、一般住宅ゆえ室内環境に差異があり、開設当初の児童5名（大学生・専門学校生・高校生3名）には各自の好みに合った部屋を話し合って選んでもらい、個室のクロスやデザインの決定と室内の家具の配置を任せました。

次に、「スケジュールの管理」です。まず、起床時間を個々に設定してもらいました。児童の通う学校での活動や通学に要する時間などを考えると、それぞれ生活時間帯が異なるわけですから、同一の生活時間（日課）ではなく、小規模ケアの利点を生かし、個別



に生活リズムを設定しました。その日の予定等を考え、用意したホワイトボードに翌日の起床時間や行動予定を自身で記入し、職員はそれに合わせて支援する形をとりました。

高校生Aくんは「部活動の朝練があるので、5時起床します」と言います。しかし、再三の声かけにも最終的に、「今日は（朝練は）中止になりました」と通常の時間に登校することになることも度々です。私たち職員はこれを「ごじごじ（5時5時）詐欺」と呼んでいます。朝が苦手な学校もちょっと苦手な専門学校生Bくんは、始業に間に合うギリギリまで布団の中。そこから起きて、考えるいとまがないまま勢いで通学するリズムを作りました。

また、ひとり暮らしを想定しての生活を児童と一緒に考えます。「何ができないと困る？」との問いに「洗濯とか、料理とか・・・」では、洗濯をどうするか？ 高校生たちの会話・・・。

「ひとり暮らしだと朝起きて洗濯するのは忙しいし、面倒だな」

「夜のうちに洗濯するのがいいかな」

「ひとり暮らしだと夜干しておいて、乾いたら着るっていうのもありかな？ 室内干しかな」

いろいろと考えを巡らした結果、個別の室内用の物干しを用意し、入浴→洗濯（個人分）→干す→就寝のリズムを作りました。



特別支援学校に通うCくんは、施設退所後はひとり暮らしが希望です。「料理の練習がしたい」と言い、折りも良く、学校が作業実習期間となり、「（実習期間中に）家庭の中でも生活課題を」と学校からも提案があり、Cくんの希望で朝食のおかずを自力で作ることとなりました。8:00に登校でしたが、毎朝6:00には起き、目玉焼きやウインナーソーテーなどを作りました。

「考える。決める。判断する」こうした作業が「自立」につながると考えています。

（2）お金の使い方

本体施設ですと、日用品、文房具、衣類その他生活に必要なものは常備され、「〇〇が欲しい」と言えば、倉庫などから出てきます。また、外食や衣類購入などの際は上限額が決められ、その範囲内で買い物をする練習をしていました。「あと〇〇円あるから、△△が買える、食べられる」という感覚です。

しかし、「かがやき」では文房具、身の回り品などは常備せず、必要な時に必要なものを購入することにしました。季節ごとに購入する衣類も定額の範囲で買うのではなく、必要なものを考え、予算設定して自身で買いに行くことにしました。「考えて、生活を組み立てる」ことを目指しました。自身の好みのシャンプーや歯磨きなどの身の回り品や文房具も自身で買いに行くことにしました。深夜に申し出があっても対応できませんので、時間も考えて行動する習慣も身につけて欲しいと願っています。



生活場面（洗濯）



生活場面（調理）

3. 18歳以後の支援

（1）措置延長の活用

高校等を卒業した後の生活支援について、「かがやき」では20歳まで措置延長したケースがこれまでに4人います。もちろん、高校生とは生活時間帯も行動範

囲も異なりますので生活上のルールや日課の設定も個別に対応しました。

特別支援学校卒業後に就職したDくんは、配置された早朝7:00からの勤務シフトに従って生活を組み立てました。5:30には起きるようにし、6:00には朝食が食べられるように準備しました。仕事に支障のないよう22:00就寝を心がけ、趣味のゲームの時間もある程度制限しました。給与をいただきますので自由に使えるお金は増えてきましたが、これもお互いに話し合って上限を設定しました。Dくんは20歳になり、関係機関（児相、障害福祉関係事業所、行政等）の連携もあり、グループホームへの入居が決まって退所しました。彼は入居後に「自律」ができず、就労先を退職したり、金銭面でトラブルもあり、その都度、関係機関と連携して対応しました。現在では落ち着きを取り戻しつつあります。かがやきでの生活を見直すと、ルールに従って生活してはいましたが、彼が納得していなかったのではないかと、思います。退所後には、感覚的に身についた「枠」の中で金銭感覚や生活が習慣化できれば、と考えていましたが、彼にしてみれば職員による提案が多く、自身で「考える」作業が欠如していたように思います。

また、名古屋市内の大学に進学したEくんについては大学の講義やアルバイトの都合で帰宅が深夜になることもありました。名古屋市内でアルバイトしていましたが、電車を乗り越して帰宅不能の事態になったこともありました。ただ、その時にも連絡を入れて状況報告と相談をすることができたことは成長なのかと解釈しています。

（2）退所後の支援

20歳になり措置解除後は、退所児童自立支援事業を活用したケースもあります。前述の専門学校生のCくんもその対象でした。卒業して資格を取って希望の調理師になれば、と願っていました。

また、開設当初、大学2年生だったFくんは20歳になり、かがやきに隣接するアパートに入居しました。そのアパートは大家さんが同一で、偶然にも建物の一部がかがやきと同一番地内に建設されていることから、



「同一敷地内」の解釈が成立するのでは？と退所児童自立支援事業の活用を問い合わせましたが、不可との判断（当然といえば当然の解釈と言えます）となり、奨学金とアルバイトで生活をしました。Fくんについては、就職した今も生活援助と相談は頻度こそ減っていますが、継続しています。

大家さんは光輝寮と古くからお付き合いがあり、施設長とも旧知の間柄でした。かがやきの住宅は古くは大家さんの住まいだったところで、空き家となっていたところをお借りしたものです。開設前には近隣にご挨拶に回っていただいたり、開設後も子どもたちに何かと差し入れをいただいたり、特に防災関係に気を配っていただき、感謝しております。

横道にそれましたが、そのアパートには現在、高等技術専門校を卒業して工務店に就職したGくんもお世話になっています。18歳で高校3年生に相当する年齢ですので、この1年間は自立を目指して「模擬ひとり暮らし」のような生活をしています。食事は、基本的にはかがやきで用意していますが、給食費は本人が負担をしています。最近では本人の希望で仕事が休日の時は、自分で用意することとしました。とはいえ、時には甘やかしてしまうこともままありますが・・・Gくんはほぼ毎日、かがやきに顔を出しますので、こうして継続して支援ができるのも、大家さんとのご縁があつてこそとありがたく思っています。

「かがやき」は開設から早4年が経とうとしています。この間に生活する児童の様相も変容しています。児童養護は時代を映し出すものですが、現在在籍している児童のうち3名が特別支援学校に通学しています。



かがやき児童居室

光輝寮の状況を見ても、今後かがやきに移行してくる児童もそうした傾向が見られます。退所後も何らかの形で福祉サービスや奨学金、助成金等の支援制度や社会資源を活用して生活していくケースが増えていくと思います。

かがやきで支援が完結するものではなく、福祉サービス機関等による継続支援が必要です。自立後のアフターケア体制の整備およびアフターケア機関との連携、また、相談支援事業所など障害福祉サービス機関との連携・ネットワーク作りが必須です。

4. 終わりに

かがやきの4年間の取り組みについて述べてきましたが、「よい支援ができた」と胸を張って言えるケースは正直言ってありません。しかしながら、関係を絶っていた家族と自ら連絡をとって家庭復帰したり、学校がうまくいかないと考えるや、自らインターネットを活用するなどして自身で仕事を探して就職先を見つけて来たり、職員の知らないところで児童自らが考え行動することができようになったのは、成果なのかなあ、と自らを慰めています。

近い将来求められる社会生活、家庭生活に適応していくためには、目の前の状況に対して自身で考え、判断する、決める力が必要になります。「かがやき」という小規模施設での生活や個別の支援を通して子どもたちが小さな失敗をしながら、失敗を糧に、職員とコミュニケーションをとり、アドバイスを受けながら「大人ってこうなんだ」「家庭生活ってこうなんだ」という生活様式や生活感覚を身につけていって欲しいと思います。困ったときには「あかるく（仏）、ただしく（法）、なかよく（僧）」の光輝寮の基本方針を思い出して、「自立」して「生活する力」を身につけていけるよう願っています。

児童福祉の最大の目標は、子どもたちが幸せな社会生活、家庭生活を営むことです。子どもたちがそこにたどり着くまで、見守っていくことが私たち児童福祉に携わる者の責任であり、責務であり、見届けることが私たちの喜びです。